

〔翻 訳〕

シェリー夫妻『六週間の旅の記録』（2）

小 林 龍 一

ここに訳出したのは『六週間の旅の記録』（*History of a Six Weeks' Tour through a Part of France, Switzerland, Germany, and Holland: with Letters Descriptive of a Sail round the Lake of Geneva, and of the Glaciers of Chamouni*）のうちの *Letters Descriptive of a Sail round the Lake of Geneva, and of the Glaciers of Chamouni* にあたる部分で、「1816年夏ジェネヴァ周辺で過ごした3カ月の間に書いた手紙」（*Letters Written during a Residence of Three Months in the Environs of Geneva, in the Summer of the Year 1816*）というタイトルのもとに7通の手紙が収められている。これらの手紙は、シェリーとメアリーがクレア（Claire Clairmont）とともに1816年の夏にジェネヴァ湖（＝レマン湖）やシャモニーを訪れた時に書いたものである。¹⁾

7通の手紙のうち2通（「手紙1」, 「手紙2」）はメアリーが書いたもので、5通（「手紙3」の1通と「手紙4」の4通）はシェリーによるものである。この時、シェリーはバイロンと6月23日から1週間にわたってジェネヴァ湖を周航した。手紙に「友人」とあるのはそのバイロンのことである。また、Mはメアリー、Cはクレアのことである。テキストとしては E. B. Murray, ed. *The Prose Works of Percy Bysshe Shelley* (Vol. I, pp. 206-228) を用いた。脚注のほとんどは本書に負っている。²⁾

＊

「1816年夏ジェネヴァ周辺で過ごした3カ月の間に書いた手紙」

手紙1³⁾

メアリー（1816年5月17日 ジェネヴァ、ホテル「セイシュロン」にて）

私たちは今月の8日、パリに着きました。そして、あちこちでパスポートに必要なサイ

1) 参考：拙訳「シェリー夫妻『六週間の旅の記録』（1）」、『大阪経大論集』第55巻第2号，2004年7月，pp. 287～305。

2) フランス語の固有名詞（特に地名）の日本語表記については、本学教員・佐々野卓実氏に御教示いただいた。ここに記して感謝します。最終的な責任はもちろん訳者（＝小林）にある。

3) 「手紙2」とともに宛名は無い。

ンをもらうために2日間足止めされました。フランス政府はラヴァレット⁴⁾の逃亡以来、特に慎重になっていたのです。私たちは一通の紹介状も持っていませんでしたし、パリに一人の友人もいませんでした。それで、最初着いたときは一晩足止めされるだけだと思っていたのに、ホテルに、しかも1週間分前払いで泊まらざるを得ませんでした。というのも、パリには一日単位で泊まることができるホテルは無いからです。

フランス人の態度は、対仏同盟国軍によるこの前の侵略⁵⁾以前より魅力が劣りますが、少なくともイギリス人にとっては興味深いものです。彼らの不満と憤りが絶えず垣間見られます。彼らの国を敵意に満ちた軍隊で満ちし「嫌悪すべき」(detested) 王朝を戴く^{かいま}政府が唯一ほんとうの対象である怒りと憤りを持って政治問題を見ているのも当然です。このような気持ちは、フランス人にとっては名誉とすべきであり、抑圧された人々に対する共感を持ち自由を求める運動がついには勝利を収めるのだという不屈の希望を心に抱いているヨーロッパのすべての人々を励ますのです。

パリからトロワまでの道は同じような退屈な地帯を通っていました。私たちは2年近く前にここを徒歩で行きました。⁶⁾しかしトロワを出ると、ヌーシャテルへ行く道から離れ、ジュネヴァに通じる道を取りました。そして私たちはパリを出て3日目の晩にディジョンに入り、ドールを通してポリニーに着いたのです。この町は広大な平原から急に隆起しているジュラ山脈の麓に在ります。岩壁が家屋に覆いかぶさっています。馬を手に入れるのにちょっと手間取ったので夕闇が迫るまでそこに留まりました。それから嵐を予感させる月の明かりを頼りに山奥の小さな村シャンパニョルまで進みました。道は曲がりくねり極めて急で、片側は所々に突き出た断崖が覆いかぶさり、もう一方は飛雲が落とす闇が満ちた深い谷になっていました。暴風雨の中をシャンパニョルに向かってゆっくり上っていたとき、目に見えぬ溪流の轟きによってフランスの平原を離れたことを知りました。シャンパニョルには夜12時に着きました。パリを離れて4日目の夜のことでした。

翌朝も、山中の大小さまざまな谷の道を上って進みました。景色はどんどんすばらしく荘厳になっていきます。松が密生して森を成し、人跡未踏の、いや近づきがたい景色が周囲に広がっています。谷道をたどっていくと黒々とした森が降りて来たり、曲がった木がほとんど不毛の割れ目を巡って纏れた根と縄張りを争っていたりします。かと思うと、道が霜の支配地域にまで高く曲がりくねって伸び、森が点在するようになって、木々の枝に雪が積もり、松の巨木が波のように吹き寄せられた雪に半ば埋もれていたりします。地元の話では例年春が来るのは遅いとのことでしたが、じっさい寒さは飛びきりでした。山道を上って行くと、谷を通ったときに雨を降らせたのと同じ雲が大きな雪片を密に激し

4) Lavalette (1769-1830) ナポレオン政権下の要人。第二王政復古(1815年7月8日)の際に投獄され死刑を宣告されたが、同年12月、イギリスへ逃亡した。

5) 'last invasion' 1815年6月18日のワーテルローの戦いで終わったナポレオンの「百日天下」以後のイギリスおよびヨーロッパ諸国軍によるフランス侵略とそれに続く占領のこと。「嫌悪すべき」ブルボン王朝はルイ18世によって復活した。

6) 1814年の「六週間の旅」を指す。

く降らせました。この降雪を透かしてときどき太陽が輝き、山間の壮大な溪谷を明るく照らしました。山の巨大な松の木は、雪が積もっていたり、あちこちに滞留している^{もや}靄の筋に取り巻かれたりしていました。また、黒々とした梢を明るく晴れた紺碧の青空に突き出しているものもありました。

夕闇が迫りなおも上って行くと、突き出た岩を白く覆っていた雪が道を塞ぐようになり、レルースの村に入ったときは雪が激しく降っていました。私たちはどうやらこの粗末な宿屋の汚いベッドで一夜を過ごさざるを得ないようでした。というのも——そこからジュネーブに至る道は二本あります。一つはスイス領のニヨンを経由するもので、この山越えのルートの方が近道であり、この時期には数リーグ⁷⁾にわたって深い雪に覆われてはいるものの比較的楽なのです。もう一つの道はジェクスを通るもので、あまりにも遠回りな上に危険なので、そんな遅い時間に行くことはできませんでした。しかしながら、私たちのパスポートではジェクスを通ることになっていましたし、目的地を変えることは出来ないと言われた——からです。しかし、このような警察の規則はすべて（それ自体、非常に厳しいのですが）賄賂によって緩和されるものであり、今回の障害もそうすることによって、最終的には克服することができました。私たちは4頭の馬と馬車をサポートする10人の人を雇い、夕方6時にレルースを出発しました。すでに太陽は遠くに沈み、迫りくる闇によって見えにくくなったジェネヴァ湖と遙か彼方のアルプスの景色は馬車の窓に吹きつける雪によってさらに見えにくくなりました。

しかしながら、あたりの景色は私たちの注意を惹くのに十分なほど荘厳でした——それ以上にひどく荒廃した情景は決してありませんでした。この地域の木々は信じがたいほど大きく、雪の荒野に小さな森となって点在しています。広大な雪原に変化を与えているのは、これらの巨大な松の木と私たちの道筋を示す木の柱だけでした。荘厳さに彩りを添えて目を慰めてくれる川も岩に囲まれた空き地も見当たりませんでした。無人の荒野に広がる自然の静けさは、私たちを案内する人たちの声と奇妙な対照を成していました。彼らは、元気のよい調子と身振りで、フランス語とイタリア語の混じった方言でお互いに声を掛け合っていました。それが静けさをかき乱していたのですが、それ以外には何も無いというような場所でした。

いま私たちはそれまでとは何と違った景色の所に着いたことでしょう！ 暖かい日差しと太陽を慕う昆虫の羽音のする場所に着いたのです。ホテルの窓からは空のように青く金色の光がきらめく美しい湖が見えます。対岸は斜面でブドウ畑に覆われています。しかしながら、まだ時期的には早すぎて景色の美しさを増すに至ってはいません。岸边には貴族の別荘が点在しており、その背後には黒々とした尾根がさまざまに頭をもたげ、雪を戴くアルプスの山々の中央にひとときわ高く威厳のあるモンブランが女王然とそびえています。そのような景色が湖にも映っていたのです。それはルツェルンで私たちを楽しませてくれた神聖な侘しさや深い孤独の無い、明るい夏の風景でした。⁸⁾

7) リーグ (league)：距離の単位。1 リーグは約 4.8km。

私たちはまだ適当な散歩道を見つけてはいませんでした。ご存じのように私たちは船遊びが好きでした。小舟を借り、毎夕6時ごろ湖に出ます。楽しいです。鏡のような湖面を滑ったり、強い風を受けて疾走したりしています。この湖の波は外海の航海であらゆる楽しみを奪った船酔いで私を苦しめることは全くありません。それどころか、舟の揺れが私の精神を高揚させ、きわめて愉快的気分を呼び起こすのです。ここの黄昏は短く、今のところ日々満ちてゆく月を楽しみ、帰るのはほとんどいつも10時以後です。帰ろうと岸に近づくと、花や刈られたばかりの草の心地よい香りや、キリギリスの鳴く声や、夜啼鳥よなきどりのさえずりに迎えられます。

私たちはここでは誰とも交際していませんが、時間は速く楽しく過ぎていきます。私たちは、昼の暑い間はラテン語やイタリア語を読み、陽が傾くとホテルの庭園に入って兎を見たり、地面に落ちたコフキコガネを助けてやったり、庭園の南側の壁に棲んでいる無数の蜥蜴の動く様子を眺めたりします。冬の鬱陶しさとロンドンの憂鬱さからやっと逃れたことがお分かりいただけるでしょう。私はこんなに素晴らしい気候の時にこんな楽しい所に来て、巣立った小鳥のように楽しく、どの枝まで飛んで行こうなどということは気にせず生えたての翼を試してみたいのです。鳥も経験が豊かになるほど、どの枝を選ぶかが難しくなります。しかし現在の気持ちでは、薔が膨らみかけた花や、瑞々みずみずしい春の草や、生きてこれらの楽しさを満喫している身の回りの幸せそうな生き物たちは、私にこの上ない喜びを与えてくれるのに十分です。たとえ雲がモンブランを隠すようなことがあっても。さようなら！

手紙2

コリニー ⇨ ジェネヴァ ⇨ プランパレ

メアリー（6月1日 コリニー近郊ショーピュイ館にて）

この前の手紙のあと家を替わったことが住所からお分かりでしょう。いま私たちは湖の対岸の小さな家に住んでいますので、景色はモンブランとそれに連なる雪の鋭鋒から威圧するような黒々としたジュラ山脈に代わりました。毎夕その向こうに日が沈むのが見え、暗闇がアルプスの背後から私たちの住んでいる谷に近づいて来ます。その時アルプスは輝くバラ色に染まります。それはイギリスで日光がほとんど消えようとするとき秋空の雲を染める色と同じです。湖は目の前にあり、小さな港には私たちの小舟が繋がれています。まだ夕方にはそれに乗って船遊びを楽しんでいます。残念ながら、もう私たちが初めてこの地方にやって来たとき歓迎してくれたあの輝く空を見て楽しむことはできません。ほとんど絶え間のない雨のため、たいてい家に閉じ込められています。しかし太陽が突然顔を出すとイギリスでは経験したことのない輝きと暑さを伴います。私たちを訪れる激しい雷雨はかつて経験したことがないほど大規模で猛烈です。対岸からそれが近づくのを見てい

8) 1814年の「六週間の旅」との対比。

ると、稲妻が大空のあちこちで雲間を走り、松の木に覆われ懸かっている雲の陰のために黒ずんだジュラ山脈の高所にぎざぎざの形になって突き刺さるのが分かります。その一方でたぶん太陽がきらきらと輝いていることでしょう。ある夜、私たちはかつて見たことがないほど素晴らしい嵐を「楽しみました」。湖が明るくなりました——ジュラ山脈の松の木が見え、一瞬、全景が照らし出され、それに漆黒の闇が続き、雷鳴が暗闇の頭上で炸裂したのです。

しかし、私はまだジュネヴァの近くに住んでいるのですから、私がこの町について語ることを期待していらっしゃることでしょう。しかしながら、でこぼこの石畳を歩くことの難しさを書いたところで御期待に沿うことは出来ないでしょう。家の屋根は高く、道は狭くその多くは上り坂になっています。目を引くほど美しい公共の建物も、あなたの趣味を満足させるような建造物也没有。町は防壁で囲まれ、三つの門は10時きっかりに閉じられます。フランスの時のように賄賂を使っても開けてもらうことはできません。町の南のほうはジュネヴァの人たちの散歩道になっています。数本の木が植えられた草原で、「プランパレ公園」と呼ばれています。ここにはルソーの栄光を称えて小さなオペリスクが建てられています。そしてここでは（これが人間の気まぐれというものなのですが）彼を故郷から追放した人々の後を継いだ行政官たちが、主として彼の著作によって醸成された例の革命の際に民衆に射殺されたのです。その革命は一時的な流血と不法によって汚されたにもかかわらず、人類に不朽の利益をもたらしましたし、政治家のあらゆるごまかしはもとより王の大陰謀をも完全に無に帰せしめることができるのです。現在の行政官の中で彼らの前任者たちのことを回想しつつプランパレを散歩する人は一人もいません。人々のもう一つの日曜日の気晴らしはサレーヴ山への遠足です。この山は町から1リーグも行かない所にあり、耕された平原から垂直に隆起しています。裏側から登るのですが、その苦労も山の位置からしてローヌ川とアルヴ川および湖岸の楽しい景色によって報われるものと思います。私たちはまだ行ってはいませんが。

ここでは身分がイギリスより平等です。このことは下層階級の間にも我が国におけるよりもはるかに自由で上品な態度を生み出しています。イギリスの高慢な婦人たちはこの国の勿体ぶった慣習に非常な嫌悪感を催すことでしょう。というのも、ジュネヴァで雇った人たちは当地では全く聞いたこともない（と思うのですが）イギリス人の「罵り」、つまり言葉遣いを盛んにけなしているからです。しかしながら、スイスの農民はフランス人の快活さや上品さを見習わないでしょう。彼らはフランス人よりきれいだ好きですが、動作は鈍く不器用です。私は20歳のある女の子を知っています。彼女は生まれてこのかたずっとブドウ畑で過ごしていたのですが、ブドウを何月に収穫するのかを答えることができませんでした。それで私は彼女が何月の後に何月が来るのかという順番を全く知らないことを発見しました。彼女は私が12月には輝く太陽やおいしい果物が登場し、7月には霜が降りるのだ言っても驚かなかったでしょう。でも彼女は決して理解力が不足しているというわけではありません。

ジュネヴァの人たちは、きわめて清教徒的でもあります。習慣で日曜日にはダンスをし

ますが、町でフランスの施政が撤廃されるや直ちに行政官は劇場の閉鎖を命じ、建物を取り壊すという処置が取られたのです。

最近の良いお天気に恵まれています。ブドウ畑で働いている人たちが夕方に唄う歌に耳を傾けることほど楽しいことはありません。すべて女性で、そのほとんどが男のような、しかし耳に快い声を持っています。歌のテーマは羊飼いの恋、羊の群れであり、美しい女羊飼いの恋に落ちた王子の歌でした。メロディーは単調ですが、静かな夕方にそれを聴くと楽しいです。また、家の背後の山や湖上から夕日を眺めて楽しんでいます。

こういったことが、ここでの楽しみです。季節が良ければもっと楽しみが増すことでしょう。というのも、それは主として日光やそよ風によってもたらされる楽しみだからです。まだ町の周辺への遠足には出かけていませんが、数回は行こうと思っています。つぎの手紙では、言葉の魔術によって、森に包まれたアルプスや森の巨大な陰のために暗くなった溪流や森の近辺へあなたの霊妙な心を御案内しようと思います。さようなら！

手紙3

メイユリー ⇨ クラランス ⇨ シヨン ⇨ ヴヴェ ⇨ ローザンヌ

シェリー（ピーコック⁹⁾宛 7月12日 ジェネヴァ、コリニー近郊モンタレーグルにて）

ヴヴェから戻って2週間近くになります。この旅はあらゆる点において楽しいものでした——特に『ジュリー』（*Julie*）¹⁰⁾に見られるルソーの想像力の並外れた美しさを初めて知りましたので。景色が、独特のきわめて感動的な魅力が生まれている描写にどれほどの魅力を添えているかということは想像もできません。しかし、私たちの周航の概略をお伝えします。それは8日間続きました。もしスイスの地図をお持ちでしたら、私の足跡をたどることができるでしょう。

私たちは6月23日午後2時半にモンタレーグルを離れました。湖は静かで、3時間舟を漕いで小さな美しい村エルマンスに着きました。そこには、村人が言うにはジュリアス・シーザーによって建てられたという、塔の廃墟がありました。それに似た塔が他に三つあったのですが、1560年にジェネヴァの人たちが自分たちの砦を造るために壊しました。私たちは窓のような所から中に入りました。壁はとても堅固で、壁に使われている石は非常に硬く未だに鑿^{のみ}の跡が残っていました。漕ぎ手たちは、その塔の高さが以前はその3倍はあったと言いました。壁の厚い部分に階段が二つあります。そのうちの一つは完全に壊れ、もう一つは半ば朽ちていますので、梯子でしか上れません。町そのものはブルゴーニュの女王によって建設されたのですが、手当たりしだいにすべてのものを焼き略奪したベルンの住民たちのために現在の状態に落ちぶれてしまい、今は数人の漁師が住んでいるだけの取るに足りない村になっています。

9) Peacock, Thomas Love (1785-1866) イギリスの小説家、詩人。シェリーの友人。

10) ルソー『新エロイズ』（*Julie, ou La Nouvelle Héloïse*）のこと。メイユリーを舞台に家庭教師サン・ブルーとその生徒ジュリーとの恋愛を描いた書簡体小説。1761年出版。

私たちはエルマンスを離れ、日暮れ時にネルニエの村に着きました。陰気で汚い私たちの宿の部屋を確認してから、湖畔を散歩しました。紫色に染まり霧のかかった広大な湖水が、傾斜し「舟を引き上げた岸」¹¹⁾の近くの、岩だらけの小島によって碎かれる光景は美しいものでした。湖にはたくさんの魚が戯れ、多数の魚が羽虫を捕らえるために岩礁に集まっていました。

私たちは村に戻ると、湖のそばの堤防に座り、子供たちが九柱戯¹²⁾のような遊びをしているのを見ていました。ここの子供たちは体が異常に変形していて病みみたいでした。彼らのほとんどは腰が曲がり、喉が肥大していました。しかし、ある子はそれまで見たことがないほど態度や動作が上品でした。彼の顔には気品が溢れていて美しかったです。目と口元には繊細さを示す高慢さと優しさが入り混じり、多分その繊細さのゆえに彼は育てられ方によっては不幸になるか犯罪に誘い込まれたりするかも知れません。しかし高慢さよりも優しさが勝っていました。その高慢さは温和な感情を習慣的に使用することによって本来の荒々しさを従順なものに変えるように思えました。友人はその子になにがしかのお金を与えました。その子は屈託のない穏やかな感謝の笑みを浮かべてそれを無言で受け取り、何事もなかったかのように遊びに戻って行きました。これらすべてのことは滅多に経験しないことでしょう。しかし、こんな静かで太陽の輝く夕方に、こんなに遠く離れたロマンティックな村で、ここまで私たちを運んで来た静かな湖のそばにいたら、想像力は最も活気のない姿にさえも自身の幻影に似たものを吹き込むことを、きっと抑えることはできないでしょう。

宿に戻ると、ボーイが部屋を整え、先には絶望的な様子だった部屋の大部分を片付けてしまっていました。その部屋を見て友人はギリシアのことを思い出しました。彼は、そんなベッドに寝るのは5年ぶりだと言いました。この状況によってかき立てられた思い出に関する会話への影響は徐々に消え、何ひとつ不愉快な気持ちも無く部屋に引っ込んで、翌日の旅やそれから戻ってささやかな冒険を振り返る喜びのことを考えながら休みました。

翌朝、私たちは古城があり木々に包まれた家が点在する人里離れたイヴォワールの村を通過しました。その村はネルニエからほど遠くない所の、数マイルにわたる深い入江を縁取る崖の上にあります。この崖の所に来ると、湖はより荒々しい雄大さを持った様相を帯び始めました。頂が雪で輝いているサヴォワ県（フランス）の山並みが複雑な斜面となって湖に落ち込んでいます。岸壁の上のほうは松林で暗くなっており、それも上に行くほど深く密になっていて、雪と氷が青空に突き刺さった剥き出しの岩の先端と混じり合っています。しかし、山裾のほうにはクルミ、クリ、オークの森や草地があって、そのあたりがより温暖な気候であることが分かります。

正面の崖を通過するとすぐにドランス川が見えました。それは峡谷を流れ落ち、湖の近くで支流と交わって扇状地を成しています。カモメに似ていますがそれよりも小さい多数

11) シェイクスピア『真夏の夜の夢』, II.i.85。

12) 現在のボウリングのもとになった遊戯。

の美しい黒アジサシが日光のために背を深紅色に染めて、川水と湖水が混じり合う浅瀬を飛び交っています。エヴィアンに近づくと、山がそれまでより急な傾斜を成して湖に落ち込み、森と岩が混在する塊が輝く山頂の上に突き出ていました。

私たちは7時頃この町に着いたのですが、その日はかつて経験したことが無いほど天気の変化が急激でした。朝は寒くて雨が降っていました。それから東寄りの風と乱れ飛ぶ雲。つぎに雷雨と至るところに向かって吹く風。そして南からの暖かい突風と山頂に懸かる夏雲と峰の間を占める明るい青空。エヴィアンに着いて半時間ほどすると、頭上の黒雲から稲妻がひらめき、雲が消えてからも続きました。「ジュピターが雷鳴を伴う馬で青空を駆け抜けた」¹³⁾のです。天気は、ホラティウスに与えたような影響を私には全く与えませんでした。

エヴィアンの人たちの様子は以前に私が見たよりも惨めで病的で貧乏でした。¹⁴⁾実際、サルディニアの王の支配下にある人々とスイスという独立した共和国の国民を較べれば、両者が数マイルしか離れていないにもかかわらず、専制政治の破滅的な悪影響が如実に現われています。当地は「泡立つ水」(eaux savonneuses)と呼ばれるミネラルウォーターを産します。夕方、パスポートのことでちょっとしたトラブルが生じました。しかし役人は友人の身分と名前¹⁵⁾を聞いた途端に、そのような事態を招いたことを陳謝しました。宿は快適でした。周航の間に、松林に覆われた遠くの山の高い所に廃城が見えました。私はそれを見てライン川の古城を思い出しました。

翌朝、帆を一枚しか張ることができないほど強い風の中をエヴィアンを去りました。波もきわめて高く、舟にはたくさんの荷物を積んでいましたので、ちょっと危険な感じがしました。しかしながら無事メイユリーに到着しました——湖を圧する鬱蒼とした森や、非常に美しい緑の草地や、水際で波の音を反響させている岩壁の天辺から突如立ち上がっている剥き出しで水の頂きを持った山を高速で通過した後に。

私たちはここで、マリー・ルイーーズ皇后¹⁶⁾がメイユリーで現在の宿に建て替えられる前の建物に泊まったということを聞きました。当時、それはサン・プルーを記念して造られたもので、最も惨めな村の家と変わらなかったそうです。「天才」が「権力者」の門の所で入場を嘆願するときには、義務や喜びとは最も縁遠い人々でさえ人間に共通な感情を持つことが分かるとは何と素晴らしいことでしょう。それを手に入れることは皇后には似つかわしいことで、偉大で開明的な国に対する落胆の中に含まれる愛情のこもった賞賛を強めるものです。ブルボン王家に属していた彼女はルソーのことなど敢えて覚えてもいませんでした。彼女が得た権力は、彼女の夫の王朝支配が、諸国民の間では言わば常識となっている民主主義を踏みにじったお陰なのです。この小さな出来事によって、旧体制や陰謀

13) ホラティウス (65-8 B.C., ローマの詩人), 『オード』(Odes) I.34.5-8。

14) 当時エヴィアンはサルディニアの王に支配されていた。

15) バイロンは貴族(男爵)で、当時すでに『チャイルド・ハロルドの巡歴』(第1～2巻, 1812年)などの文学作品によって時代の寵児になっていた。

16) Marie Louise (1791-1847) ナポレオン一世の2番目の妃。

の上に築かれた権力がそれらを復活させ永久に人類の間に存続させることが、どれほど不適当であり如何に不可能であるかが分かります。私たちはそこで食事を取りました。そして、それまで味わった事がないほど美味しい蜂蜜に出会いましたが、それはまさに山の花の精華であり、その花と同じ良い香りがしました。たぶんその村はこの製品から名前を付けたのでしょう。¹⁷⁾メイユリーはサン・プルーの観念的な亡命の有名な舞台ですが、たとえルソーが魔法を使わなかったとしても、全くうっとりするような場所でしょう。松、クリ、クルミの林が陰を落としています。それはイギリスでは見られないほど壮大で果てしない森です。この森には信じられないほど青々とした草地の広がる小さな谷があり、多数のきわめて珍しい花で飾られ、ジャコウソウが香りを放っています。

メイユリーを離れると湖は幾分静かになったようでした。岸に沿って進んで行ったのですが、その雄大さは崖を曲がるごとに増していきました。しかし喜ぶのは早すぎました。風が徐々に強くなり、ついには激しく吹いてきました。それは湖のはるか彼方から吹いてきましたので、物凄い高さの波を生じ、湖面全体を混沌とした泡で覆ってしまいました。漕ぎ手の中のひどく愚かな男が、大暴風で舟が沈みそうになっても、あくまでも帆を張ったままにしていました。彼は自分の誤りに気づくと、帆を降ろし完全に成り行きに任せることにしました。それで舟は一瞬舵が効かなくなりました。おまけに舵が壊れて操船が非常に難しくなっていました。波がつぎつぎに飛び込んで来ました。泳ぎの達者な私の友人はコートを脱ぎ、私も同じようにしました。そして、いつ沈むかと思いながら、腕組みをして座っていました。しかしながら、再び帆が張られ、舵が効くようになり、まだ波が高くて危険でしたが、数分でサンジャンゴルフ村の避難港に着いたのです。

私は死を目前にして少々恐怖の入り混じった複雑な気持ちになりました。一人でしたら私の気持ちも楽だったでしょう。しかし、友人が私を助けるつもりだったことは分かりませんし、私の命を救うために彼の命が危険にさらされたかも知れないと思うと私は恥づかしさで押し潰されそうでした。サンジャンゴルフに着くと、私たちが乗っていたような粗末な舟をあまり見たことがなく仮にもそんな天候のときに敢えて湖面に出たことを心配して岸に立っていた地元の人たちは、漕ぎ手たちと驚きと祝福の視線を交わしました。漕ぎ手たちも私たちと同様、上陸する事ができて大いに喜んでいました。

サンジャンゴルフはメイユリーより更にきれいです。山はより高く、きわめて高い頂がもっと唐突に湖に落ち込んでいます。空高く聳える峰の谷はまだ深い雪を抱き、急流の通り道を隠しています。これらの中で極めて高い一峰はサン・ジュリアン岩で、その高峰の下の方は森がより深く広がっています。クリの木が風景に特色を与えており、極めて美しく、それまでに見た他の全ての山の風景とは異なる一幅の絵として私の記憶に残ることでしょう。

私たちは早く着いたので、馬車に乗ってローヌ川の河口を訪れました。山と湖の間、クリの大木の森の下、上流の雪が流れ込み岩に鍾乳石を造りその上を流れる悠久なる川のそ

17) メイユリー (Meillerie) は 'miel' すなわち「蜂蜜」を連想させる。

ばを進んだのです。私たちはその日の朝の大暴風に薙ぎ倒された一本の巨大なクリの木を見ました。ローヌ川が湖に流れ込む個所は途方もなく大きな白波の線で区切られていました。川は湖に流れ込む前と速さは変わりませんが、濁って黒ずんでいます。私たちはヴァレー州（スイス）への道を1リーグほど進み、ブーヴリ塔という城の所で停止しました——どうやらそこがスイスとフランス（サヴォワ県）の境のようで、イタリアへ行くとすればパスポートが必要です。

道の片側には巨大なサン・ジュリアン岩があり、それが道にのしかかるようでした。城門を抜けると雲に覆い隠されたヴァレー州の雪山が見えました。道のもう一方には、クラランスやヴヴェュや両者の間に広がる湖に覆いかぶさるような黒ずんだ山並みに囲まれてローヌ川の柳の多い河原があり、他の景色とは際立った対照を成していました。河原の真ん中に小さな丘がぼつと隆起し、その上のこんもりとしたクリの森から教会の白い尖塔が覗いています。私たちは日が沈む前にサンジャンゴルフに戻り、私は『ジュリー』を読んで夕方を過ごしました。

翌朝、友人が起きるのが遅かったので、私には朝食前に時間がありました。それでサンジャンゴルフで湖に落ちる瀧を探訪しました。実は斜面を流れ落ちる川が連続した瀧になっているのであって、岩に当たって絶えず轟音を立て、荒涼とした斜面を覆い飾っている木の葉や花に絶えず水しぶきを浴びせています。この川に沿って付いている道は、岸の絶壁を避けて草地を通り抜けたり、切り立って洞穴になった岩の裾を縫うように通ったりしていました。私は草地でイギリスでは見たこともなかったような花でブーケを作りました。その花が珍しいがゆえに、イギリスのブーケよりも美しいと思いました。

戻って朝食を取ったあと、私たちはクラランスへ船出しました——まずローヌ川の三つの河口を、つぎにシヨン城を見ようと決めて。天気は晴朗、湖面は静かでした。青い湖水を経てローヌ川を通過しました。湖との合流点から遠く離れていても流れは速いです。濁った川水が湖水に注いでいたのですが、湖水と混じり合うまでには至っていませんでした（参照：『新エロイズ』第4章、書簡17）。私は終日『ジュリー』を読みました。それは、今になって思うのですが、すばらしい人々が登場する、卓越した才能に満ちた、人間の感受性を超越した場面の連続です。メイユリー、シヨン城、クラランス、ヴァレー州やサヴォワ県の山脈も、かつて見慣れた物やかつて大切であった生けるものの遺物として想像力に訴えかけてくるのです。実はそれらは一人の人、しかも現実と呼ばれる記録に偽りの影を投げかけるほど強烈に明るい精神の持主によって創造されたのです。

私たちはシヨン城に向かい、そこの地下牢や塔の牢獄を訪れました。これらの牢獄は湖の下に掘られています。最大の地下牢は7本の柱で支えられ、その上のY字型になった柱の頭が天井を支えています。その天井のすぐ上が水深800フィートの湖底なのです。これらの柱には鉄の輪がくりつけられ、それには観光客や明らかに囚人のものと思われるたくさんの名前が刻まれていました。今となっては囚人たちを思い出させる物は何も残っておらず、孤独をそんな風にして紛らした囚人たちもとっくの昔に居なくなっていました。そこに刻まれていた日付は、古いことに1670年でした。これは宗教改革が始まった年です

が、実はこの地下牢はその宗教改革の期間のあと長期にわたって、偶像崇拜の制度を揺るがしたり否定した人々の収容所になっていたのです。人類は今でも、ゆっくりとではあります但し偶像崇拜の影響から抜け出しつつあります。

長く高いこの地下牢のすぐ近くに細長い独房がありました。そしてその向こうに飾りの無いアーチに支えられた、もっと大きくはるかに高く黒ずんだ独房がありました。このアーチの一つに梁が渡してありました。これは囚人たちが密かに絞首刑にされた時に使われたものですが、今や黒ずんで腐っていました。私は人間が人間に対して行なうことが喜びである冷酷で非人間的な暴政に対してそれ以上に恐ろしいと思った瞬間はありませんでした。それは実際、偉大なタキトゥスの「人類の滅亡」¹⁸⁾を非常に重大かつ動かしがたい予言にする多くの恐ろしい仕業の一つでした。この城を案内してくれた警察官が、「秘密の仕掛けによって湖へ抜ける穴があるのだが囚人がなんとか脱出する前に地下牢全体が水浸しになってしまうのだ！」と教えてくれました。

私たちは荒れた波の中、逆風を衝いてクラランスに向かいました。私はクラランスに上陸した時ほど、古い時代精神がかつて慈しんだ住まいを見捨てたのだということを強く感じたことはありませんでした。私は、ジュリーとサン・ブルーは私がいま見ている山の方を見ながら、いや、私がいま歩いている地面を踏みしめながら、何度もこの壇になった道を歩いたのだと思いました。宿屋の女将が窓から「ジュリーの森」を指さして教えてくれました。少なくともこの村に住んでいる人は、そのようなロマンティックな人たちが実際に居たのだと考えて感動しています。夕方、私たちは徒歩でそこへ行きました。それはまさにジュリーの森です。木の下に干し草が作られていました。森そのものは老いていましたが、若木が点在し活気に溢れていました。それらが後を継ぎ、私たちが死んでしまった未来において自然愛好家たちに木陰を提供し、彼らはここが優しさと心の安らぎの想像上の住まいだったという思い出を愛することになるのです。私たちはブドウ畑の間を歩いて行きました。階段状の細い道からはこの感動的な景色が見渡せます。なぜこの瞬間、世の冷酷な格言が、身を任せれば計り知れないほど甘美な私の憂鬱な涙が流れるのを抑え、夜の闇が涙をかき立てる物を呑み込んでしまったのでしょうか？

実は友人が私に教えてくれたのですが、そこはジュリーとその恋人サン・ブルーが乗った舟が引っくり返りそうになり、サン・ブルーが彼女とともに湖に飛び込もうとした場所であり、私たちにも嵐の危険が迫っていたのです。そのことを書くのを忘れていました。

翌日、私たちはクラランスの城を見に行きました。方形の頑丈な建物で、窓がほとんど無く、谷というよりはクラランスの平原を見下ろす二重の段丘に囲まれていました。そこに至る道はクルミヤクリの森の中を急斜面を曲がりくねって上っていました。私たちは段丘の所でバラの花を摘みました——その中の何本かはジュリーの手で植えられたものの子孫かもしれないと思いながら。そして、枯れたり萎れたりしている葉をその跡に撒きまし

18) この語句はどうやらシェリーの記憶違いのようで、「人類の滅亡」(perniciēs humani generis)ではなく「人類に対する憎悪」(odio humani generis, *Annals*, 15.44)であろう。(Murray, p. 444)

た。

私たちはもう一度「ジュリーの森」へ行きました。そしてまさにその問題の場所が今では全く跡形もなくなっていることを発見しました。積み重ねられた石がかつて小さな教会が建っていた場所を示していました。私たちがこの蛮行の張本人を盛んに貶していると、ガイドが、その土地がサン・ベルナルの修道院のものであることや、この非道な行為は修道院の命令によって行なわれたことを教えてくれました。強欲が人間の心を冷酷にすると、因習的な宗教制度は自然な感受性にはるかに有害な影響を及ぼすものであるということを、私はかねて知っていました。私は、孤独な人間はかつて自然を実体以上に美しいものにした天才のことを記憶していることから生じる尊敬の念を踏みにじることを恥づかしさのあまり我慢することがあるが、群れる人間はすべての繊細さ、慈悲心、自責の念、真実の優しい崇高なすべてのものを否定することこそが団結の印だと考える、ということが分かりました。

私たちは舟でクラランスからヴヴェへ行きました。ヴヴェは簡素な点で私がかつて見たどんな町よりも美しいです。その市場や木々が点在する広々とした広場からはサヴォワ県やヴァレー州の山並みや湖やローヌ川の溪谷が見渡せました。ルソーはまさにこのヴヴェにおいて『ジュリー』の構想を練ったのです。

私たちはヴヴェからウーシーにやって来ました。ローザンヌの近くの村です。ヴォー州の湖岸は、村とブドウ畑でいっぱいですが、私が常に賞賛している^{へんび}辺鄙さを補って余りある静かで格別に美しい様相を呈しています。山々は非常に高く岩が多く、頂上のあたりには森が点在しています。瀧が断崖から轟音を響かせ遠くで輝いています。ある場所で巨大な岩が滑り落ちた跡を二つ見ました。岩は背後の山から落ちたのでした。一つは若い女性が眠っていた部屋に落ちてきたのですが彼女は無傷でした。石が通ったブドウ畑は完全に潰れ、地面が裂けていました。

雨のために2日間ウーシーで足止めされました。しかしながら私たちはローザンヌを訪れ、ギボン¹⁹⁾の旧居を見ました。彼が『衰亡史』を書き上げた朽ちた別荘と、最後の1行を書き終えてモンブランを見たテラスのそばの老いたアカシアの木を見せてもらいました。彼が仕事を完成したときに発した後悔の言葉には、何か厳粛な、いや感動的なものがあります。彼が『衰亡史』を書こうと思い立ったのはカピトリヌス丘²⁰⁾の遺跡においてでした。慈しみ慣れ親しんだ仕事から突然解放されたことによって、彼は親友が死んだ時のように悲しみと孤独に陥ったに違いありません。

友人はギボンを記念して保存しておこうとアカシアの木の葉を数枚拾い集めました。私は、ギボンより偉大で神聖なルソーの名を汚すのではないかと思って、そうすることを慎みました。ルソーの不朽の作品群について熟考すれば、私の心には何かを受け入れる余地

19) Edward Gibbon (1737-94) イギリスの歴史家。『ローマ帝国衰亡史』(*The History of the Decline and Fall of the Roman Empire*, 1776-88)の著者。彼はこれを完成したとき「静かな憂鬱」(*sober melancholy*)を感じた、という。

20) ローマにある。

は全く無かったのです。ギボンも冷徹で冷静な精神の持主でした。そのような事に固執する自分の偏見を罵りたいという気になるよりは、「ジュリーとクラランス」と「ローザンヌとローマ帝国」が私にルソーとギボンを比較せざるをえないようにしたのです。

私たちはその日の唯一の晴れ間の中を戻りました。私は波が激しく打ち寄せる栈橋を散歩しました。虹が湖に懸かっていた。もっと正確に言えば、一方の端が湖に、もう一方はサヴォワの山麓に懸かっていたのです。メイユリーのものかどうかは分かりませんが、数軒の白い家が黄色い稲妻の向こうで輝いていました。

6月30日（土）、私たちはウーシーを去りました。そして2日間の楽しい船旅ののち、日曜日の夕方、モンタレーグルに着きました。

手紙4

サン・マルタン ⇨ セルヴォ ⇨ シャモニー ⇨ モンタンヴェール ⇨ モンブラン
シェリー（ピーコック宛）

〔1816年7月22日、シャモニー、ホテル「ロンドン」にて〕わが友よ、君が私たちの家を探してくれている間に、それを飾る思い出を探して放浪しています。²¹⁾私は、あなたが堂々とした美しい自然の全てのものの詳細に興味を持っているだろうと思い込むような間違いは犯しません。しかし、私がいま囲まれている景色をあなたにどのように説明しましょうか？ 驚きと賞賛を表わすあらゆる形容語句を駆使すること——ほとんど想像を絶する満ち足りた驚きこそ——が、いま溢れんばかりに私の心を満たしているイメージをあなたの心に植え付けることになるのです。私は旅行家たちの歓喜の言葉も読みました。私は彼らのように大袈裟に書かないよう注意しなければなりません。よって私は、私がお話しすることができることだけを、すなわち、もし話すとすれば、ジュネヴァを出発した20日の朝以後の私たちの行動や見た物のみを、あなたが想像できるように詳しく述べることにします。

私たちは朝8時半に、かねてから計画していたシャモニーへの旅に出発しました。サレーヴ山からアルプスの麓まで広がる平野を通って行きました。その辺りは地味が豊かで麦畑や果樹園が広がり、上が平らになった上り坂が交差していました。雲ひとつ無く途方もなく暑かったです。アルプスが絶えず見えていました。さらに進んで行くとアルプスの外縁を成す山々が私たちを包み込みました。アルヴ川に注ぐ流れに架けられた橋を渡りました。アルヴ川そのものは雨で非常に水かさが増していて常に道路の右手を流れています。

枝を垂れたポプラのような美しい木の並木道を通り抜けてボヌヴィルに近づくと、両側の麦畑は洪水に覆われていました。ボヌヴィルは小ざれいな小さな町で、町を見下ろす大きな建物である白い塔の牢獄を除けば何ら目立った特色はありません。アルプスはボヌヴィルから始まります。その一峰は森に囲まれ、アルヴ川の対岸からすぐの所に聳えています。

21) シェリーはイギリスへ戻ったときのために、ピーコックに家を探しておいてくれるよう頼んでいた。

す。

ボヌヴィルからクリューズまで、道は広々とした肥沃な平地を通り、メイユリーの場合のように周りを松とクリが混在する森に覆われた山に囲まれています。道はクリューズで切り立った山々の中にポッカーりとくり抜かれたようなアルヴ川の小峡谷に沿って突然右折しています。ここでは景色はそれまでより荒涼として巨大だという特徴を帯びています。谷は狭くなり、川と道だけのスペースしかありません。松の木立が土手の所まで降りて来ています。不揃いな若木が、森をはるか眼下に見て紺碧の空高く眩い白雲の中に聳える巨大な岩盤を覆っています。クリューズから半マイルほど進んだ辺りの景色は、規模の大きさと、岩の上で草を食べている山羊しか住んでいないような不毛の近づきがたい辺鄙さにおいて、マトロック²²⁾のそれとほとんど同じです。

マグランの近くで、お互いに1リーグも離れていない瀧を二つ見ました。それらは細い流れなのですが、少なくとも1,200フィートの落差がありながら流れは細いという矛盾した特徴を示しています。最初の瀧はエジプトの巨大な女神像にそっくりの巨大な岩の黒い絶壁の突き出た縁から落ちていました。そして流れは想像上の像の頭に当たって優美に砕け、そこから水よりは雲に似た折り重なった泡となって最も美しい布地で出来たヴェールのように落ちていました。それから一つにまとまって像の下部を隠し、水路のうねりに隠れて突然より大きな瀧になり、私たちの道筋を横切ってアルヴ川に向かっていました。

もう一つの瀧はもっと連続的で大きなものでした。それは猛烈に落下しているために、水というよりは立ち込めた蒸気で出来た幽霊のように見えました。というのも、それは次第に消えてゆく雲の背後から現われたかのように、背後の黒々とした山を越えて流れていたからです。

景色の特徴はサン・マルタン——地図ではサランシュ——に着くまで同じように続きました。山は絶えず高くなり、道を曲がるごとに、より岩の多い山頂、より深く広い森、より黒く深い谷が現われました。

翌朝、私たちは2人のガイドに付き添われて、ラバに乗ってサン・マルタンからシャモニーへ行きました。前日のようにアルヴの渓谷を進みました。この谷は岩だらけの絶壁の高所に眩い雪が混在する巨大な山に周りを取り巻かれていました。麓はなお原生林に覆われていましたが、それは山の奥に分け入るにつれてだんだん黒く深くなっていきました。

サンマルタンから1リーグの所にある小さな村に着くと、ラバを捨て、ガイドに案内されて小さな瀧を見に行きました。大量の水が250フィートも落ちているのを見ました。水が岩から岩へ突進し、飛び散ったしぶきが霧になり、その真ん中に無数の太陽虹が懸かっていましたが、太陽が時おり雲間から顔をのぞかせると、消えてしまったり言葉では言い表わせないほど鮮明になったりしました。瀧に近づくと飛沫が雨のように降りかかり、衣服がさっと流れ落ちる小さな滴で濡れてしまいました。瀧は私たちの足元の岩だらけの深い滝壺に落ちていたのですが、そこで溪流に姿を変え、前進を阻む岩の所で轟音を立てな

22) マトロック (Matlock) はダービーシャー (イギリス) の町。鉱泉が出る。

がらアルヴ川へのコースをたどっていました。

さらに進んで行くと、道は谷というよりは大峡谷を通り抜けて行きました。それは恐ろしいアルヴ川の寝床であると同時にアルヴ川が創造した物でもありました。私たちは山の間を曲がりくねりながら上って行きました。その際限の無さは想像力を萎縮させました。それから急流を横切ったのですが、3日前から溶けた雪が流れ落ちて道を寸断していたのです。私たちはセルヴォという小さな村で食事を取りました。ここには鉛と銅の鉱山があります。そこでケジックやベズゲラートにあるような博物館を見学しました。²³⁾そして、スイスカモシカの角や、モンブラン南部の雪の荒れ野に棲むブクタンという極めて珍しい野生の山羊の角を見ました。ブクタンは牡で、角の重さは少なくとも27英ポンドはあります。そんな小柄な動物がどうしてこんな途方もなく重い角を付けていることが出来たのか信じられません。角は非常に特殊な形で、幅が広くずっしりしていて先が尖り、年齢を示すと思われる輪がたくさん付いています。最も大きな角には輪が17も付いていました。

セルヴォからシャモニーまでは、さらに3リーグあります。モンブランが目の前にありました。アルプス——高所全体に広がる無数の氷河が複雑に曲がりくねった一つの谷に押し寄せていました。森——言語に絶するほど美しいがその美しさの中に威厳を備え、混在するブナ、松、オークが私たちの進む道に影を落したり後退したり。そして後退した場所を見たことがないような緑色の草地が占め、奥へ行くほど徐々に暗くなっていました。モンブランは目の前にありましたが、雲に覆われていました。恐ろしげな割れ目が走っている麓が頭上に見えました。モンブランにつながる山脈の一部でとてつもなく眩しい雪の高峰が、高所のあちこちで雲を透かして輝いていました。私はそれまで、どんな山が目の前にあるのかということを知りませんでしたし、想像したこともありませんでした。空に聳えるこれらの広大な峰が突然目の前に現われた時、狂気とは無関係の恍惚とした感嘆の念が掻き立てられました。そして、いいですか、このたった一つの景色が私たちの関心と想像力に強く訴えたのです。それは広範囲にわたる空間を取り囲んでいましたが、晴れた青空に屹立する雪の鋭鋒は私たちの道に覆いかぶさるようでした。峡谷は松の巨木に覆われ、その深さのゆえに暗くなっていました。谷は非常に深かったので、上の道からはそこを曲がりくねって流れる御し^{ぎよ}がたいアルヴ川の轟音さえ聞こえませんでした。すべては私たち自身のものも同然で、私たちがいま私たちの心を占めているような印象を他の人の心にも生ぜしめる者になったかのようにでした。自然は、それが有する調和力によって私たちの精神を最も神聖な人の精神よりも安らかな状態に保ってくれる詩人でした。

シャモニーの谷（実はそれは、ボヌヴィルやクリューズから私たちが辿った谷の続きだと考えてもよいかも知れませんが）に入ると、たぶん海拔6,000フィートはあろうかと思える山並みに雲が懸かっていたのですが、雲はモンブランだけでなく、それに連なるより低い、現地で「鋭峰」と呼ばれている山々をも効果的に隠していました。私たちは谷を進

23) ケジック (Keswick) とベズゲラート (Beddgelert) は、ともにイギリスの地名。前者は湖水地方、後者はウェールズ東部グウィネズ州にある。

んでいたのですが、突然、空で轟いている抑えつけられていた雷が爆発したような音が聞こえました。しかし、その音は地上で聞こえ、雷ではないことが分かりました。ガイドはすぐに音がした対岸の山の一点を指さしました。それは雪崩でした。岩の間の通り道に雪煙が見えました。そして、それが落下する轟音が断続的に聞こえました。それは急流の川床に落ち、それを埋めてしまいました。そして、やがて黄褐色の水が自らの寢床である峡谷に広がるのを見ました。

私たちは今日は予定したボソン氷河へは行きませんでした——歩いて数分の所にあったのですが、少なくとも疲れていない時に眺めたいと思って。私たちは肥沃な平地を通過した時、この氷河がそのすぐ側まで来ているのを見ました。表面は無数の奇妙な形に砕けていました。高さが50フィート以上もある円錐形や角錐形の結晶体がその表面に立ち、眩く輝く氷の絶壁が谷の森や草地を圧していました。この氷河は、黒々とした松の森に延べられた輝く帯のように、曲がりくねりながら溪谷を通り抜けて谷から上の方に向かい、氷河の元になった霜の塊に合流しています。この景色には単なる規模の大きさ以上のものがあります。全体にわたって荘厳さがあるのです。すばらしい事物が帯びている色には畏敬の念を起こさせる荘厳な優美さがあります。それは言語に絶する実際の大きさととは全く異なる独特の魅力なのです。

＊

〔7月24日〕昨日の朝、私たちはアルヴ川の水源へ行きました。この村から1リーグほどの所にあります。水が氷のアーチから猛烈に迸り出て広大な谷に多くの流れとなって伸びています。谷は氾濫した水によって破壊され剥き出しになっています。水を生み出す氷河が堅い氷の絶壁となって、この大洞窟と空き地とそれを取り囲む松の森に覆いかぶさっています。川の向こう側には巨大なモンタンヴェールの氷河が流れています。長さ50マイルで、想像もできないほど高く、非常に鋭く急峻なので空に突き刺ささっているように見える山々の間の深い割れ目を埋めています。アルヴ溪谷の流れの一つの間近の岩に座っていると、この氷河から大量の水が高所で剥離し、大きな鈍い音を立てて谷に突入するのが見えました。落下の激しさのために氷は粉々になり、瀧のように岩を乗り越え、谷に侵入しそれを満たしました。

夕方、私はガイドのデュクレとボソン氷河を見に行きました——彼は私がこの国で出会った唯一のましな人でした。この氷河は、モンタンヴェールのそれと同様、谷の間近まで迫っています。谷では霜の降りた銀の網織物に覆われた輝く水晶の先端のような眩い白さの絶壁と高峰が、緑の草地と暗い森に覆いかぶさっています。この氷河はゆっくりとした、しかし圧倒的な進み方で周辺の牧草地や森を破壊しつつ、荒廃という作業を長い年月をかけて行ないつつ、絶えず谷に流れ込んでいます——溶岩なら1時間で完成させるでしょうがそれよりずっと徹底的に。というのも、いったん氷が通過した所には、どんなに強い植物でも育つことが出来ないからです。ごく例外的に、一度下降が始まったのち、後退するようなことがあっても。

氷河は、絶えず凍結する境界面で万年雪の一部が溶けて生じた水が凍ることによって造

られる個所で始まる動きによって、1日に1フィートの割合で絶えず前進しています。氷河は流れ出した地点から山のすべての残骸すなわち、巨岩や大量の砂と石を引きずり降ろします。これらの物は、堅い氷の圧倒的な流れによって押し出され、山の斜面に来ると、全速力で転がり落ちてばらばらに碎けるのです。私は春（当地の冬は静かで安全です）に落下した一つの岩が40フィート四方に散らばっているのを見ました。

氷河の先端は、ボソンのそれのように、想像しうる最も強烈な荒廃の様相を呈しています。敢えてそれに近づく人はいません。というのも、絶えず落下する巨大な氷の高峰が絶えず再生されているからです。氷河に接している森の松は、氷河の先端の所で薙ぎ倒され広範囲に散らばっています。氷の裂け目の間近の、根こそぎにされた地面になおも立っている、枝をもぎ取られた数本の幹の様子には、筆舌に尽くしがたいほど恐ろしいものがあります。草地は砂と石に埋まって消滅しています。この氷河はここ1年間で300フィート前進して谷に流れ込みました。博物学者のソシュール²⁴⁾は、氷河には伸縮する時期がある、と言っています。スイスの人々はそれとは全く異なる考えを持っていますが、私が判断するところ、こちらのほうが有力です。モンブランの頂上とそれに隣接する山々の雪が絶えず増加していること、また、シャモニーの谷では氷が氷河の形を取って短く変化の多い夏の間は溶けることなく存続するということは、全ての人に認められています。この氷河を生み出している雪が増加するに違いないとすれば、また、谷の温度がすでに流れ込んだ大量の氷の存続を妨げていないとすれば、結果は明らかです。氷河は、少なくともこの谷に溢れるまで、増加するに違いなく、存続し続けることでしょう。

私はビュフォン²⁵⁾の崇高だが憂鬱な理論を追求するつもりはありません。その理論とは、私たちが住んでいる地球が未来のある時期に、極地の氷が張り出して霜の塊になったり、地球の極めて高い所で造られる霜の塊になるだろう、というものです。アーリマン²⁶⁾の優越性を主張する人なら、雪崩、奔流、岩、雷、とりわけ彼による支配の証拠でもあり象徴でもあるこの氷河——さらには、人間はこの地域にあっては不具か白痴なのであり、そのほとんどが興味や賞賛を掻き立てる可能性のある如何なるものも奪われているのだ、と人間を貶めること——に対する彼の最終的な侵害の最初の企てのように、ここには必然性という揺るぎない手によって苛酷な荘厳さが刻まれ、しかも、彼が辺りにばらまいている荒廃した雪原すなわち死と霜の場所にはその邪神が君臨していると想像することでしょう。これは、対象の陰気で崇高さに欠ける面ですが、詩人や哲学者が考慮する価値のないものです。

今日は晴天のようだというので、朝、モンタンヴェールの氷河を見に出かけました。氷河が傾斜した谷を満たしているこの辺りは「氷の海」と呼ばれています。この谷は海拔

24) Saussure, Horace Bénédict de (1740-99) スイスの植物学者、地質学者、登山家。

25) Buffon, Georges Louis Leclerc, Comte de (1707-88) フランスの博物学者、哲学者。『博物誌』(*Histoire naturelle générale et particulière*, 1749-1788)の著者。

26) 〔ゾロアスター教〕Ahriman=Angra Mainyu. Spenta Mainyu（善と光明の神）と戦う、悪と暗黒の邪神。

950トワーズ²⁷⁾すなわち7,600フィートです。あまり進まない内に雨が降り始めました。しかし行程の半分以上の所まで頑張り、それから、ずぶ濡れになって帰って来ました。

＊

〔7月25日、シャモニーにて〕私たちはモンタンヴェールの氷河見物から戻ってきました。そこは、いわゆる「氷の海」で、全く目の眩むような驚異に満ちた眺めです。山際に沿って曲がりくねった道は広くて急で、松に覆われていたり雪の谷を渡っていたりしています。シャモニーからモンタンヴェールの小屋までは3リーグでその半分はラバで行ったのですが、1日目に私が乗ったラバは足元がおぼつかなく、ガイドが言うところの「たたら」を踏んで倒れてしまいました。それで私は危うく山から真っ逆さまに落ちるところでした。私たちは、雪に覆われ巨大な石が絶え間なく転げ落ちてくる谷を越えました。その前日にも、私たちが戻ったすぐ後で巨石が一つ落下しました。ガイドは谷を早く通るよう望みました。というのも、ほんのちょっとした音でも石の滑落を招くことがあるとされているからです。しかしながら、私たちは無事モンタンヴェールに着きました。

厳しい霜の住処である切り立った山が、この谷をぐるりと取り囲んでいます。その側面には氷と雪が盛り上がり、壊れて積み重なり恐ろしい割れ目を見せています。頂は鋭く剥き出しで尖っており、覆いかぶさる急な斜面は雪が留まることさえ許さないでしょう。あちこちで垂直の割れ目に眩い氷の線が走り、筆舌に尽くしがたい光沢を持った吹きつける霧を透かして輝いています。この世のものとは思えない物のように雲を貫いているのです。谷そのものは大量のうねる氷に満たされ、ひどく緩やかな上り坂がこの恐ろしい荒れ地の果てまで続いています。幅は2分の1リーグ（すなわち約2マイル）に過ぎませんが、それよりずっと狭く見えます。まるで霜が突然、激流の波と渦巻を合体させたような様相を呈しています。私たちはその上を少し歩きました。氷の波は雪原から12～15フィートほど盛り上がり、途中で測りがたい深さの長い割れ目が交差しています。割れ目の切り口の氷は空よりも美しい青色をしています。この辺りではすべての物が変化し続け、動いています。この大量の氷は一体となって前進し、昼も夜も止まることはありません。永遠に砕け、爆発するのです。うねりが、あちらで沈むかと思えば、こちらで盛り上がるのです。二つとして同じ形のものはありません。岩石や雪や氷が覆いかぶさる絶壁から落下したり空高く聳える頂から転げ落ちる反響音は、ほとんど一瞬も途切れることはありません。人は、ストア学派の哲学者が考えた神のように、モンブランが巨大な動物であり、凍った血が永久に石の血管を循環していると思うでしょう。

私たち（M、Cと私）はこのような景色に囲まれて野外の芝生で食事をしました。空気は刺すように冷たく澄んでいます。私たちは吹きつける霧に包まれたり日光に元気づけられたりしながら下山しました。そして7時までに宿に着きました。

27) トワーズ (toise)：昔、フランスで用いられた長さの単位。1トワーズは6.395フィート（1.949m）。950トワーズ＝6,075.25フィートとすべきところを、シェリーは1トワーズ＝8フィートで計算している。

＊

〔7月28日、モンタレーグルにて〕 その翌朝、私たちは雨の中をサン・マルタンに戻りました。景色は広大さを無くし、厚い雲が高山に懸かっていました。しかし、にわか雨の合間に夕映えが訪れ、にわか雨を運んできた雪のように白い密雲の間に青空が覗きました。ときどき眩い山並みが頭上の雲の切れ目から輝き、その偉観が持つ魅力は全く失われてはいませんでした。私たちはアルヴ川に架かるペリジエ橋という木の橋とアルヴの溪谷を再び通過しました。狭い道に覆いかぶさる松の森や、絶壁の崖っぷちに造られ原生林が陰を落として不気味な廃墟となっているサン・ミシェル城を再び通り過ぎました。森が深いがゆえに、シャモニーの谷よりも美しいセルヴォの谷を再び通過しました。モンブランもこの谷の片面を成しており、対岸は不規則なすり鉢形をした巨大な山並みに囲まれています。山の一つは土石に埋もれていましたが、それは50年前に谷の上の方が崩落したものです。落下の際の雪煙がピエモンテ州（イタリア）で目撃され、アルプスで火山が爆発したのではないかということ調査するためにトリノから人々が出かけて行きました。それは何日間も残骸の衝撃と轟音で以って近隣の谷に恐怖を撒き散らしながら崩落を続けました。夕方、サン・マルタンに着きました。翌日、私たちは上述の谷道をうねうねと進み、夕方、宿に帰り着きました。

私たちはモンブランを訪れた記念に、鉱物や植物の標本を少しと二、三の水晶の印章を買いました。ケジック、マトロック、クリフトン²⁸⁾と同様、シャモニーにも『博物誌』ゆかりの博物館があります。その所有者は数ある食わせ者の中でも最も卑しむべき輩で、宿屋の主人やガイド、いやそこに住んでいるすべての連中とともに、病人を食物にする蛭²⁹⁾のように旅人の弱みと騙されやすさを食物にしています。私が出た中で最も興味深い物は、アルプスの珍しい植物の種をすべて集めた膨大なコレクションで、袋にその植物の名前が書いてあります。私はこれをイギリスの庭に植え、その中からあなたが欲しいと思う物を差し上げるつもりです。それらはみんなキンポウゲ——「古典的な」キンポウゲ——が軽蔑するには及ばない仲間なのです。みんな彼のように熱狂的で彼より大胆で、彼に若々しい詩人が凝視するように感動的で崇高な事物について語ってくれることでしょう。³⁰⁾

この山塊に狼の群れが居ることをお話ししましたでしょうか？ 彼らは冬に、1年のうち6カ月は雪に埋もれている谷に降りて来て、屋外で目につく物は何でも貪り食うのです。狼はどんなに獐猛で頑健な犬よりも強いのです。この辺りには熊は居ません。ルツェルンに居たとき私たちは、その湖の周辺の森では時々見かけられるということを聞きました。

28) クリフトン (Clifton) はブリストル (イギリス) の近郊にある。

29) Murray の原文では 'leaches' となっているが、これは明らかに 'leeches' (Ingpen, VI, p. 142) であろう。

30) 「古典的な」(classical) と言い、「彼」と言っているのは、ワーズワース (William Wordsworth) に対する揶揄である。ワーズワースには『キンポウゲ』(*The Small Celandine*, 1804年) という短詩がある。

さようなら！

参 考 文 献

Ingpen, Roger, and Walter E. Peck, eds. *The Complete Works of Percy Bysshe Shelley*. 10 vols. London: Ernest Benn, 1926-1930 (Julian Edition), rptd. New York: Gordian Press, 1965.

Murray, E. B., ed. *The Prose Works of Percy Bysshe Shelley*, Vol. I, Oxford University Press, 1993.

*

谷治正孝監修『エアリアマップ 世界地図19 スイス』昭文社 2002年。

谷治正孝監修『エアリアマップ 世界地図21 フランス』昭文社 2003年。

松島正一著『イギリス・ロマン主義事典』北星堂書店 1995年。

『岩波 西洋人名辞典』岩波書店 1956年（増補版 1981年）。

『小学館 ランダムハウス英和大辞典』〈特装版〉小学館 1973年（第2版 1994年）。